

## 令和2年度第4回鳥取県教育審議会学校等教育分科会（要旨）

- 1 日 時 令和2年度12月22日（火） 午前10時から午前11時30分まで
- 2 会 場 とりぎん文化会館第3会議室
- 3 出席者 小椋分科会会長、尾崎委員、金山委員、重本委員、高尾委員、田中靖委員、中村委員、松岡委員、松本委員、田中宏委員、西川委員、渡邊委員

### 4 要 旨

#### （1）専門学科・総合学科の在り方について

- 産業界のニーズに合わせて高校生を育成すると、産業界のニーズが変わったときはその方向性を変えなければならない。
- 産業界のニーズに合わせるよりも、よりタフに社会で生きていける子どもたちを育てることを公教育として目指してほしい。
- 志望や目標は常に変わるものであり、希望して専門高校に入っても違うことをやりたくなる子供たちも必ずいる。その変化に対応できる広い選択肢が示されるといい。
- 職業感を養うのは家庭の問題だが、親の仕事内容や社会の中での役割が子供たちに伝わっていない現状がある。
- 普通科高校に入ることをの目的を、親がもう少しはっきりとさせてあげるべき。
- 普通科高校でも専門の授業が受けられるとよい。
- 親世代に対して、職業についての認識の仕方を示すことが必要。
- 3月に卒業して4月には必ず就職、進学しなければならないという社会的な流れを考え直すべきである。
- 学びが選択できると理想的。例えば、普通科の生徒が近隣の専門高校の授業を受け、単位認定することもできれば、学ぶ意欲の向上につながるものと考ええる。
- 専門学科、総合学科に進学すると、その時点で自分の運命が決められるような雰囲気になるので、まんべんなく勉強できる普通科に偏重するのではないか。
- 過去の教育改革で設置した特色のある学科の大半が廃止された経緯を踏まえれば、規模が小さくてもオーソドックスな学科を維持することが必要と考える。
- 子どもの人生は、いい先生がいるといい方向に変わるので、先生の能力、情熱、哲学、プロ意識を高めることが必要。
- この授業が将来役に立つのかという実学志向よりも、目の前の課題に没頭し一生懸命取り組むことが大事である。
- インターンシップは、人と出会える点で将来のキャリアを広げることに役立つことをアピールしてはどうか。
- 規模の小さい学校は、少人数である分、個々の生徒の活躍の機会があることをアピールしてはどうか。
- 専門高校では、技術的なことだけではなく、経営者としての視点を学ぶこともあっていい。
- 高校に進学してから進路の考え方が変わった場合に、編入などで高校を変わるといい。
- 重要なのはワクワク感であり、ワクワク感を与えられるよう、先生を再トレーニングすると若い人たちにチャンスを与えられる社会へ変わっていく。
- 学びを深めるのであれば、専攻科がなくても大学進学を考えればいいのではないか。
- 高専から大学に編入できるように、専門高校から高専のある段階に編入できる流れがあるといい。

## (2) 特別な支援が必要な生徒に対する指導及び支援の在り方について

- 通級指導に対する偏見を解消するためにも広報活動が必要。
- 発達障がいが増えていることは適切に診断がなされているということであり、保護者としてはありがたい。
- 小学校の通級では、自分を見つめなおすことができ、何事に対してもやる気が出て、学力も伸びる効果があるので、高校までの持続的な支援が望ましい。
- 特別支援が丁寧になされるための、校内の体制づくりが必要。
- 引継ぎを保護者だけに任せるのではなく、子どもや保護者のニーズをまとめるコーディネーター等の中継ぎの機関が必要。
- LD等専門委員は、通級に特化せず特別支援教育全般に対応できるので、拡充すべき。
- 低学年時に困りごとが改善されたとしても、年齢が上がり生活が変わってくれば新たな課題が出てくるため、高校まで充実した支援を希望する。
- 通級に通う生徒の保護者が安心できるよう、通級の保護者会があるといい。
- 全校に通級が設置できないとしても、集まることのできる基幹校があるといい。
- 高校入学時に引継ぎがなされているにも関わらず、先生自身の理解が十分でないことが原因で不登校になるケースが多いことから、先生自身が学んで自己更新してほしい。
- 通級の数を増やし、教員の質を上げることが必要。
- 高校生になれば、特別支援が必要な子どもたちへの理解や、受け入れる子どもたちへの教育を小中学校よりももっとストレートにできると考える。
- 切れ目のない支援の仕組みが望まれる。